

篠塚は、望の体に触れるのがとても好きらしい。

手の届くところにいれば、いつも髪や手足に触っている。もっと近ければ、腰を抱いたり、うなじや顔に触る。顔を触るのが特に好きで、TV　しばらくためていたという経済ニュースのビデオを見ていても、しょっちゅう指先で唇をなぞったり、鼻筋をたどったり、耳をいじったりする。

嫌とは思わない。嫌ではないけれど、恥ずかしい。特に、耳を触られるのが恥ずかしい。

髪を触られても、あまり気にならない。髪にはいつも気をつかっている。そのかいあって、痛みやすい髪型なのに枝毛はほとんどない。毛先を、光に透かしてみてもやっとなるくらい黒に近い紺色に染めているのは、望の自慢だ。

指もあまり気にならない。爪は毎日のように手入れしているし、形もいい。顔もかわまない。それほど悪い顔とは思わないし、いつも鍛えている。顔の形は生まれつきのまま変わらないけれど、かわいい表情は鍛えられる。

耳は　篠塚が触ったときまで、考えたこともなかった。

自分の耳は、かわいいのか、かわいくないのか。望は見当もつかない。

かわいいのなら、それはそれでいい。耳がかわいいくらいで満足して、かわいくなるうとする努力をやめたりはしない。かわいくないのなら、それはそれでしかたない。あまり華奢でない体と同じように、あきらめるしかない。

どちらでも、そんなに大したことではない。困るのは、それが自分ではわからないということだった。

なぜ困るのかというと、篠塚が望の耳をどう思っているのか、とても気になる。もし「かわいい耳ね」と言われたら、有頂天になつて喜んでしまうかもしれない。黙っていられると、冴えない耳だと思われているかもしれない、と不安にかられる。

つまり恥ずかしいという感情は、自分の大切にしていることへの評価を相手に握られているということ、でも自分の大切なことは自分で評価すべきで、だからかわいくなるうとする努力は必要でと考えていたときだった。

「会いたいって言ってもらえて、嬉しかった。

理由なんて訊いたら、野暮なんでしょうね 答えないでね。理

由なんて全部言い訳」

経済ニュースのビデオを止めて、篠塚は言った。

「いまのセリフ、ちょっと滑ってる」

「滑ってるほうが気持ちいいと思わない？ 決まったら肩が凝るじゃない」

「それはそうだけど」

篠塚は、望の髪を手にとって、色の変わり目のあたりをしげしげと眺めながら、

「望は気持ちいいの、あんまり好きじゃないみたいだものね」

そんなことないよ、ボクは と答えかけて、篠塚の意図を悟る。

「…ボクに変なこと言わせようとしてる」

「ほら、嫌がってる」

「なにそれ、変なこと言うのが気持ちいいなんて」

途中まで言っつて、口をつぐむ。

「気持ちいいなんて、なに？」

「…変なこと言わせようとしてる」

「望が自分で言おうとしたんじゃない？」

「違うよ、千鶴が変な方向に持つてくからだよ」

「どうしても私に言わせたいの？」

「言わせたいって、ボクは別に千鶴に言っつてほしいことなんてないもん」

「人に言われるより、自分で言うほうがいいものね」

「千鶴がボクになに言わせたいのかなんで、ボクはわからない」

千鶴が教えてくれたら、言うかもしれないけど」

「かもしれない、じゃ駄目ね。かならず言っつて約束しなきゃ」

それも、ちゃんと本気で言うの。オウム返しじゃなくて、自分の言葉にして。私が納得するまで、何度でも繰り返して」

「すぐく変なこと言わせようとしてる」

「変なこと？ まさか、『がちょーん』なんて言わせると思っつっ」

「じゃあどんなこと言わせるの」

「気持ちよくなること」

「そんな、気持ちよくなんならぬもん」

「よくなるのは望だけじゃないのよ。」

私を、気持ちよくして」

それは魅力的な誘いだっただけだ。このあいだは、生まれて初めてのことはいいえ、篠塚に与えられたものを受け取るだけだった。今度は自分のほうからも働きかけたい。

悔いは残したくない。篠塚に抱かれるのは、もしかしたら会うのも、今日が最後だ。

「…ふざけないって約束してくれたら、約束する」

「いいわよ。」

じゃあ、そうね、最初は」

*

二人で朝食を作り、一緒に食べる。

篠塚は、ごくたまに余裕のあるときにしか料理しないという。そのせいでか、そのわりにか、キッチンはずみずみまでぴかぴかで、使うのは気がひけるくらいだった。

「今日も仕事なの？」

篠塚の暮らしぶりをはじめて聞いたとき、望は、別世界の話だと思った。朝は七時半に家を出て、夜は日付が変わる前に帰れば早いほうだという。土日は帰るのが早くなるだけで、ここ三ヶ月は丸一日休んだことがない。望にとっては、なぜ生きていられるのかと思つような暮らしだ。

「いいえ、今日は一日休み」

「三ヶ月ぶりだっけ？ 冬休み？」

「冬休みは明後日から。」

本当は今日もやることがあったんだけど、やめたの。望が会いたいって言うてくれたし。

日曜に働くっていつても、中身はくだらないことばかり。おかげで休みを作るのも簡単」

「どっか遊びに行くの？」

「行きたい？ いいわよ。あんまり遠くへは行けないけど」

「えーとね…」

望はちよつと考えて、

「千鶴とデートって、なんかイメージじゃないかも。服とかつりあわないし」

「そう？」

「そつういえば夏実さんって 冬花さんのお母様のほうのね、今の私より若く見えたような気がする。ほとんど働いたことのない人だったから、気持ちが悪かったのかも」

冬花の母親は、冬花が物心つく前に男と駆け落ちした。十六歳で結婚してすぐに冬花を産み、二十八歳で亡くなった。篠塚は、晩年の彼女を知っているという。

「そつういう意味じゃないよ」

「なら、こんな関係なんて太陽の光を浴びたら灰になりそうだから？」

「…千鶴、なんか自虐的？」

朝食を食べ終え、食器をキッチンに運ぶ。軽く水で流して、食器洗い機に入れる。忙しい身だけあって、篠塚の家には、家事を楽にするものが多い。

「ごめんなさい。ちよつと、いろいろあって」

「いいよ。そつう千鶴もかわいい」

なにげなくテーブルに置いた手を、篠塚は握って、指先を口に運んだ。水道の水で冷えた指が、心地よく温まる。

初めて篠塚に触れたときの、ほつとするような安らかな気持ちを思い出す。理解されているという気持ち 同じものを抱えているという気持ち 同じ暗闇のなかで寄り添っている、互いを見知らぬ二匹の小動物のような。

「…するの？」

このままどこかにさらって行ってほしい。そつうして、もう二度と冬花に会えないようにしてほしい。

冬花に会うのが怖い。会えないのなら、ずっとそのまま冬花のことを好きでいられる。この闇のなかにいたい。でも、会わずにはいられない。だから、さらって行ってほしい。

けれど篠塚はけっしてそんなことはしない。たぶん、それがわか

っていたから、篠塚に抱かれることができた。

「いいえ。」

この指で冬花さんに触るのかしら、って思って

「そういうこと言うの、やめようよ」

「自虐的な私もかわいいんでしょ？」

「…千鶴って、ときどき冬花に似てる」

篠塚は寂しげに笑った。

「車で送るわ。どこかに寄っていく？ 遅くなっちゃったけど、

クリスマスプレゼントもあげたいし」

「あ、じゃあ、お年玉の先払いもちょうだい」

「それはだめ」

どうせもう会わないくせに、という言葉が続いているような気がした。本当にそう思っているかもしれない。そうであってほしい。